

菊池寛

志賀直哉氏の作品

志賀直哉氏の作品

一

自分は現代の作家の中で、一番志賀氏を尊敬して居る。尊敬して居るばかりでなく、氏の作品が、一番好きである。自分の信念の通に言えば、志賀氏は現在の日本の文壇では、最も傑出した作家の一人だと思つて居る。

自分は、『白樺』の創刊時代から志賀氏の作品を愛して居た。それから六、七年に成る。その間に、自分は且つて愛読して居た他の多くの作家（日本と外国とを合せ

て)に、幻滅を感じたり愛想を尽かしたりした。が、志賀氏の作品に対する自分の心持丈は変って居ない。之からも変るまいと思う。

自分が志賀氏に対する尊敬や、好愛は殆ど絶対的なもので従って自分は此の文章においても志賀氏の作品を批評する積つもりはないのである。志賀氏の作品に就いて自分の感じて居る事を、述べて見たい丈である。

二

志賀氏は、その小説の手法に於いても、その人生の見

方に於いても、根底に於いてリアリストである。此の事は、充分確信を以て云つてもいいと思う。が、氏のリアリズムは、文壇に於ける自然派系統の老少幾多の作家の持つて居るリアリズムとは、似ても似つかぬように自分に思われる。先ず手法の点から云つて見よう。リアリズムを標榜する多くの作家が、描かんとする人生の凡ての些末事を、ゴテゴテと何等の撰択もなく並べ立てるに比して、志賀氏の表現には厳肅な手堅い撰択が行われて居る。志賀氏は惜しみ過ぎると思われる位、その筆を惜しむ。一措もゆるがせ忽ゆるがせにしないような表現の厳肅さがある。氏

は描かんとす事象の中、真に描かねばならぬ事しか描いて居ない。或事象の急所をグイグイと書く丈である。本当に描かねばならぬ事しか描いて居ないと云う事は、氏の表現を飽く迄も、力強いものにして居る氏の表現に現われて居る力強さは簡素の力である。厳肅な表現の撰択から来る正確の力強さである。こうした氏の表現は、氏の作品の随所に見られるが、試みに「好人物の夫婦」の書出しの数行を抜いて見よう。

「深い秋の静かな晩だつた。沼の上を雁が啼いて通る。細君は食卓の上の洋燈を端の方に引き寄せて其の下で針

仕事をして居る。良人は其傍に長々と仰向けに寝ころんでぼんやりと天井を眺めて居た。二人は長い間黙つて居た」

何という冴えた表現であろうと、自分はこの数行を読む度に感嘆する。普通の作家なれば、数十行乃至数百行を費しても、こうした情景は浮ばないだろう。所謂リアリズムの作家にこうした洗練された立派な表現があるだろうか。志賀氏のリアリズムが、氏独特のものであると云う事は、こうした点からでも云い得ると思う。氏は、此数行に於て、多くを描いて居ない。而も、^{しか}此数行に於

いて、淋しい湖畔に於ける夫婦者の静寂な生活が、如何にも潑刺として描き出されて居る。何と云う簡潔な力強い表現であろう。こうした立派な表現は、氏の作品を探せば何処にでもあるが、もう一つ「城の崎にて」から例を引いて見よう。

「自分は別にいもりを狙はなかつた。ねらつても迎も當らない程、ねらつて投げる事の下手な自分はそれが當る事などは全く考へなかつた。石はコツといつてから流れに落ちた。石の音と共に同時にいもりは四寸程横へ飛んだやうに見えた。いもりは尻尾を反らして高く上げた。

自分はどうしたのかしら、と思つて見て居た。最初石が當つたとは思はなかつた。いもりの反らした尾が自然に靜かに下りて來た。するとひぢを張つたやうに、傾斜にたへて前へついてゐた兩の前足の指が内へまくれ込むと、いもりは力なく前へのめつてしまつた。尾は全く石へついた。もう動かない。いもりは死んで了つた。自分は飛んだ事をしたと思つた。虫を殺す事をよくする自分であるが、その氣が全くないのに殺して了つたのは自分に妙ないやな氣をさした」

殺されたいもりと、いもりを殺した心持とが、完璧と

云つても偽ではない程本当に表現されて居る。客観と主観とが、少しも混乱しないで、両方とも、何処迄も本当に表現されて居る。何の文句一つも抜いてはならない。また如何なる文句を加えても蛇足になるような完全した表現である。此の表現を見ても分る事だが、志賀氏の物の観照は、如何にも正確で、澄み切つて居ると思う。此の澄み切つた観照は志賀氏が真のリアリストである一つの有力な証拠だが、氏はこの観照を如何なる悲しみの時にも、欣びの時にも、必死の場合にも、眩まされはしないようである。之は誰かが云つたように記憶するが、「和

解」の中、和解の場面で

「『えゝ』と自分は首肯いた。それを見ると母は急に起上つて来て自分の手を堅く握りしめて、泣きながら『ありがたう。順吉、ありがたう』と云つて自分の胸の所で幾度か頭を下げた。自分は仕方がなかつたから其頭の上でお辞儀をすると丁度頭を上げた母の束髪へ口をぶつけた。」と描いてある所など、氏が如何なる場合にも、そのリアリストとしての観照を曇らせない事を充分に語つて居る。

三

志賀氏の観照は飽くまでもリアリスチックであり、その手法も根底に於いてリアリズムである事は、前述した通だが、夫ならば全然リアリズムの作家であろうか。自分には決してそうは思わない。普通のリアリストと烈しく相違して居る点は、氏が人生に対する態度であり、氏が人間に対する態度である。普通のリアリストの人生に対する態度人間に対する態度が冷静で過酷で、無関心であるに反しても、ヒューマニスチックな温味を持って居る。氏の作品が常に自分に、清純な快さを与えるのは、実に

この温味の為である。氏の表現も観照も飽迄リアリスチックである。がその二つを総括して居る氏の奥底の心は、飽迄ヒューマニスティックである。氏の作品の表面には人道主義などと云うものは、おくびにも出て居ない。が、本当に氏の作品を味読する者にとって、氏の作品の奥深く鼓動する人道主義的な温味を感じずには居られないだろう。世の中には、作品の表面には、人道主義の合言葉や旗印が山の如く積まれてありながら、少しく奥を探ると、醜いエゴイズムが蠢動して居るような作品も決して少くはない。が、志賀氏は、その創作の上に於て決して

愛を説かないが氏は愛を説かずしてただ黙々と愛を描いて居る。自分は志賀氏の作品を読んだ時程、人間の愛すべきことを知ったことはない。氏の作品がリアリスチックでありながら、而も普通のリアリズムと違って居る点を説くには氏の短篇なる「老人」を考えて見るといい。

之は、もう七十に近い老人が、老後の淋しさを紛らす為に芸者を受出して妾に置く。芸者は、若い者に受出されるよりも老先の短い七十の老人に受け出される方が、自由になる期が早いと云ったような心持で、老人の妾になる。最初の三年の契約が切れても老人はその妾と離れ

られない。女も情夫があつたが、此老人と約束通に別れる事が残酷のように思われて、一年延ばす事を承諾する。一年が経つ。その中に女は情夫の子を産む。今度は女の方から一年の延期を云い出す。そして又一年経つ裡に女は情夫の第二の子を産む。そして今度は老人の方から延期を申出す。そしてその一年の終に老人は病死して妾に少からぬ遺産を残す。そして作品は次のような文句で終る。

「四月の後、嘗つて老人の坐つた座蒲団には公然と子供等の父なる若者が坐るやうになつた。其背後の半間の間

には羽織袴でキチンと坐つた老人の四つ切りの寫眞が額に入つて立つて居る……」

此題材は、若し自然派系の作家が扱つたならば、何んなに皮肉に描き出しただらう。老人が何んなにいたましく嘲笑されただらう。が、志賀氏はかかる皮肉な題材を描きながら、老人に対しても妾に対しても充分な愛撫を与えて居る。「老人」を読んだ人は老人にも同情し、妾をも尤もだと思ひ、其中の何人にも人間らしい親しみを感ぜずには居られないだらう。情夫の子を、老人の子として、老人の遺産で養つて行こうとする妾にも、我等は

何等の不快も感じない。もし、自然派系の作家が扱ったならば、此題材は寧ろ読者に必ずある不快な人生の一角を示したであろう。が、志賀氏の「老人」の世界は、何処迄も人間的な世界である。そして、我々は老後の淋しさにも、妾の心持にも限りなく引付けられるのである。氏の作品の根底に横わるヒューマニスティックな温味は「和解」にも「清兵衛と瓢箪」にも「出来事」にも「大津順吉」などにもある。他の心理を描いた作品にも充分見出されると思う。

四

氏の作品が、普通のリアリズムの作品と違って一種の温かみを有して居る事は、前に述べたが、氏の作品の背景はただそれだけ夫丈であろうか。自分は、夫丈とは思わない。氏の作品の頼もしさ力強さは、氏の作品を裏付けて居る志賀直哉氏の道德ではないかと思う。

自分は耽美主義の作品、或は心理小説、単なるリアリズムの作品にある種の物足らなさを感ずるのは、その作品に道德性の欠乏して居る為ではないかと思う。ある通俗小説を書く人が「通俗小説には道德が無ければならな

い」と云ったと云う事を耳にしたが、凡ての小説はある種の道徳を要求して居るのではないか。志賀氏の作品の力強さは志賀氏の作品の底に流れて居る氏の道徳の為ではないかと思う。

氏の懐いて居る道徳は「ヒューマニティー人間性の道徳」だと自分は解して居る。が、その内で氏の作品の中で、最も目に着くものは正義に対する愛 (Love of justice) ではないかと思う。義ただしさである。人間的な「義ただしさ」である。「大津順吉」や「和解」の場合には夫それが最も著しいと思う。

「和解」は或る意味に於て「義ただしさ」を愛する事と、子

としての愛との恐るべき争闘とその融合である。が、「和解」を除いた他の作品の場合にも、人間的な義しさを愛する心が、随処に現われて居るように思われる。

が、前に云った人道主義的な温味があると云うのも、今云った「義しさ」に対する愛があると云う事も、端的に云えば、志賀氏の作品の背後には、志賀氏の人格があると云った方が一番よく判るかも知れない。そして作品に在る温味も力強さも、此人格の所産であると云った方が一番よく判るかも知れないと思う。

志賀氏の作品は、大体に於いて、二つに別つ事が出来

る。夫は氏が特種な心理や感覺を扱った「剃刀」「兇を盗む話」「范の犯罪」「正義派」などと、氏自身の実生活により多く交渉を持つらしい「母の死と新しい母」「憶ひ出した事」「好人物の夫婦」「和解」などとの二種である。志賀氏の人格的背景は後者に於いて濃厚である。が前者も、その芸術的価値に於いては決して後者に劣らないと思う。氏は、その手法と觀照に於ては、今の文壇の如何なるリアリストよりももつと、リアリスチックであり、その本当の心に於いて、今の文壇の如何なる人道主義者よりも、もつと人道主義的であるように思われる。

之は少くとも自分の信念である。

五

志賀氏は、実にうまい短篇を書くと思う。仏蘭西のメリメあたりの短篇露国のチエホフや独逸のリルケやウィードなどに劣らない程の短篇を描くと思う。之は決して自分の過賞ではない。自分は鷗外博士の訳した外国の短篇集の「十人十話」などを読んでも、志賀氏のものより拙いものは沢山あるように思う。日本の文壇は外国の物だと無条件でいい物として居るが、そんな馬鹿な話はな

いと思う。志賀氏の短篇などは、充分世界的なレヴェル迄行つて居ると思う。志賀氏の作品から受くる位の感銘は、そう横文字の作家からでも容易には得られないように自分は思う。短篇の中でも「老人」は原稿紙なら七八枚のものらしいが、実にいい。説明ばかりだが実にいい（説明はダメ飽く迄描写で行かねばならぬなどと云う人は一度是非読む必要がある）。「出来事」もいい。何でもない事を描いて居るのだがいい。「清兵衛と瓢箪」もいいと思う。

志賀氏の作品の中では「赤西蠣太」とか「正義派」な

どが少し落ちはしないかと思う。

色々まだ云いたい事があるが、此処で止めて置こう。
兎も角、自分の同時代の人として志賀氏が居るといふ事は、如何にも頼もしく且つ欣ばしい事だと自分は思う。

最後に一寸云って置くが、自分は此文章を、志賀氏の作品に対する敬愛の意を表する為にのみ書いたのである。

——七年十一月——

日本文学電子図書館

志賀直哉氏の作品

著 者：菊池 寛

制作者：宮澤一郎

底 本：「文芸往来」

出版社：アルス

大正9年5月28日 印刷

大正9年6月18日 発行

日本文学電子図書館